

1. 《心理学科》 履修上の注意

平成 21 年度以降入学向け

以下に科目履修にあたっての注意点を挙げる。学生は履修細則と合わせて熟読し、卒業に際し、問題の起こらないように留意すること。

なお、21 年度の入学時から心理学科ではコース制を採用している。20 年度以前の入学者に対する講義科目名、履修年次などが異なっているので注意すること。

1. 学科を卒業するためには、授業科目配当表に記載されている科目のうちから、4 年次終了までに、教養科目 50 単位以上、専門科目 74 単位以上、合計 124 単位以上を履修しなければならない。このうち平成 21 年度以降入学学生については必修 44 単位、選択必修 18 単位が必要である。
2. 履修は授業科目配当表に記された配当年次に行うのが標準であるが、選択科目においては自分の現年次より下の年次に配当された科目を履修することができる。早期卒業を希望する場合の総合研究演習を除いて、所属より上の年次に配当されている科目を履修することはできない。
3. 学科では各年次に履修すべき科目と単位数を厳格に定めた学年・進級制をとってはいないが、4 年間で卒業するためには各年次に 36 単位程度を修得するのが望ましく、4 年次では総合研究演習の他、教科目を履修すればよくなるよう、計画的に履修すること。なお、1 年間に履修できる単位の上限は 50 単位である。従って、3 年次終了までに 74 単位を修得していなければ、4 年間で卒業できないことがその時点で決定することになる。
4. 心理学専門科目は、おおむねその専門性により、年次配当がなされているので計画的に履修すること。選択科目を選ぶにあたって、はじめから興味のある領域の科目にしぼってしまうのは、心理学を学ぶうえで好ましいことではない。特に認定心理士の資格申請を考えているものは、資格試験が基礎から臨床までの広い範囲で出題されることからバランスよく科目を履修するように留意すること。
5. 演習、実験演習などの科目について
 - a) 基礎演習 I・II (1 年次)

複数の心理学担当教員が手分けして指導する。学生は基礎演習のみに使用される少人数クラスに別けられ指定された教室に毎週行くことになるが、内容により異なる教員の指導を受ける。心理学入門のためのセミナーである。1 年間の授業の進め方については、最初の授業で詳しく説明されるので必ず出席すること。
 - b) 基礎実験演習 I・II (2 年次)

実験、心理テストなどの技法を実際に学ぶための授業で、学生は基礎実験演習にのみ使用される少人数クラス(班と呼ぶ)に別けられる。前期、後期ともにいくつかの授業内容(種目と呼ぶ)が用意されているが、種目で使用する部屋が固定されているので、種目が変わるたびに違う部屋に動くことになる。臨機の変更も多いので、掲示、アナウンスに注意を払うこと。すべての種目についてレポートを提出する必要がある、心理学科の一番主要な科目であるにもかかわらず、単位を取得できない学生が一番多い必修科目である。この単位を 3 年次に再履修で取るのは、3 年次の一般実験演習の負担と重なり、現実には難しい。この科目は、心理教養コース、心理キャリアコースの二つに対して異なった種目が用意されているものもある。授業初回時に両コース合同で種目の取り方などを説明するので必ず出席すること。
 - c) 一般実験演習 I・II (3 年次)

一般実験演習は 2 年次末に担当教員を決定する。どの教員に担当されるかは学生の希望に基づいて希望教員と面接し、学科で調整の上決定する。履修の登録にあたっては教員によって講義番号が異なっているので、最終的に決定した担当教員の番号を確認

すること。後期の一般実験演習Ⅱで前期の一般実験演習Ⅰと異なる教員に指導を受けることは不可能ではないが、履修上きわめて困難である。

コース毎に、どのような成果を要求するかを含め、教員ごとに授業の進め方を第1回目の授業で詳しく説明するので、必ず出席すること。

d) 総合研究演習Ⅰ, Ⅱ (4年次)

総合研究演習Ⅰ, Ⅱでは、担当教員の指導のもとに卒業研究または、卒業研究に相当する成果の報告を作成する。4年次初頭に発表される各自の指導教員の総合研究演習に履修登録をすること。

コース毎に、この授業において要求される成果は異なるが、どのような成果を要求するかは、担当教員によって指示される。心理キャリアコースでは、卒業研究報告書の作成が必須である。心理教養コースは必ずしも卒業研究報告書を要求しない場合もあるが、同等の成果は要求される。卒業研究の内容は、データ(事例を含む)に基づくものであることが望ましいが、文献を読み、自分の考えをまとめたものも可とする。複数の者が、共同で集めた同じデータに基づいて卒業研究を作成するのはかまわないが、考察は人により当然異なるはずで、各自独立に1部を作成し提出すること。連名で1部のみ提出することはできない。

枚数については、1枚800字として50から100枚を目安とする。提出期限は概ね年末となるが、決定次第掲示される。

心理キャリアコースに限らず、大学院進学を希望する学生は、卒業論文のコピー提出を求められることを想定して、論文レベルのものになるよう努力すること。

6. 心理学研究法基礎および心理学研究法応用について

心理学研究法基礎は、心理学を学問として研究するための基礎的な方法論を学ぶものであり両コースの学生の必修科目である。心理学研究法応用は21年度入学生の3年次から開講されるため、時間割に記載はない。時間割には心理学研究法Ⅱという科目が存在するが、これは20年度以前入学生のための再履修科目であり21年度以降の入学生は履修できない。なお、心理学研究法応用は、心理キャリアコースの選択必修科目であるが、心理学を研究するための研究方法の必須の知識を講義するものであり、両コースの学生とも履修することを強く勧める。

7. コース別の専門選択必修科目について

コース毎の専門選択必修科目が設置される。ほとんどの科目は21年度入学生の3年次から開講されるため、精神医学以外は時間割上には存在しないが、科目表で確認されたい。このコース毎に設置される科目は、他コースの学生が受講してはいけないということではなく、自らのコースの設置科目を最低6科目とれば、他のコースの専門選択必修科目を履修することが可能である。ただし、他コースの選択必修科目に力を入れすぎて、自コースの専門選択必修科目の数が足りなくなるといふことのないように注意すること。

8. 英語履修上の注意

英語Ⅰ～Ⅴの学期毎の開講は次のとおりである。

【1年次後期】

英語Ⅰ
英語Ⅱ
英語Ⅲ

【2年次前期】

英語Ⅱ
英語Ⅲ
英語Ⅳ

【2年次後期】

英語Ⅲ
英語Ⅳ
英語Ⅴ

- i. 英語は選択必修であるが、1年次後期に関しては、学生の意思に関わらず、前期の基礎英語の履修状況に照らして学科が指定するⅠ・Ⅱ・Ⅲのいずれかを履修する。
- ii. 2年次前期以降は、学生の意思に関わらず、その学期に開講される英語のうちから、前学期の英語の履修状況に照らして学科が指定する科目を履修する。

20年度以前入学者用

以下に科目履修にあたっての注意点を挙げる。学生は履修細則と合わせて熟読し、卒業に際し、問題の起こらないように留意すること。

1. 学科を卒業するためには、授業科目配当表に記載されている科目のうちから、4年次終了までに、教養科目 50 単位以上、専門科目 74 単位以上、合計 124 単位以上を履修しなければならない。ただし平成 19 年度以降入学生については必修 40 単位、選択必修 6 単位、平成 18 年度以前入学生については必修 50 単位、選択必修 6 単位が必要である。
2. 履修は授業科目配当表に記された配当年次に行うのが標準であるが、選択科目においては自分の現年次より下の年次に配当された科目を履修することができる。早期卒業を希望する場合の総合研究演習を除いて、所属より上の年次に配当されている科目を履修することはできない。また、心理学科はコース制導入に伴い 21 年度入学生の年次が上がる毎に時間割上の科目名が変更されていく。設置年次に各科目を履修するのが望ましいが、下の年次の設置科目を履修する必要があるときには、読み替え表などを熟読し、どの科目が相当するか、逆に異なった名称であっても既に履修した科目が読み替え表にある場合は同じ科目として扱われることに留意すること。
3. 学科では各年次に履修すべき科目と単位数を厳格に定めた学年・進級制をとってはいないが、4年間で卒業するためには各年次に 36 単位程度を修得するのが望ましく、4年次では総合研究演習の他、数科目を履修すればよくなるよう、計画的に履修すること。なお、1年間に履修できる単位の上限は 50 単位である。従って、3年次終了までに 74 単位を修得していなければ、4年間で卒業できないことがその時点で決定することになる。
4. 心理学専門科目は、おおむねその専門性により、年次配当がなされている。ある授業を理解するためには、別の低年次配当の授業を聞いていたほうがよい、といったことが多々あるので、計画的に履修すること。科目を選ぶにあたって、はじめから興味のある領域の科目にしぼってしまうのは、心理学を学ぶうえで好ましいことではない。特に認定心理士の資格申請を考えているものは、バランスよく科目を履修するよう留意すること。
5. 演習、実験演習などの科目について
 - a) 基礎演習 I・II (1年次)

20 年以前入学者はすでに履修済みのはずであるが、万が一履修できていない場合は、必ず単位を取得しておくこと。授業の進め方については、最初の授業で詳しく説明されるので必ず出席すること。
 - b) 基礎実験演習 I・II (2年次)

20 年度以前入学者は既に履修済みのはずであるが、万が一履修できていない場合は、必ず谷を取得しておくこと。1 年間の授業の進め方については、最初の授業で詳しく説明されるので必ず出席すること。
 - c) 一般実験演習 I・II (3年次)

担当教員の指導のもとに、卒業研究に向けて、自らの研究課題を明らかにし、その課題の研究方法について検討し、研究計画を立てて、予備的な研究を行なうのがこの授業の目的である。

一般実験演習は2年次末に担当教員を決定する。20年度以前入学者は既に担当教員が済みのはずであるが、まだ未決定の学生は希望教員と面接し了解を得て履修すること。ただし、1年次2年次の基礎演習I,II、基礎実験演習I,IIの4科目のうち3科目以上の単位が取れていない場合は、一般実験演習の履修を認めない。また、当該4科目のうち前期の単位が取れたことにより、3科目以上の単位が取得できた場合は後期から一般実験演習IIの履修を認めるので、成績が判明したら速やかに、希望教員との面接を行うこと。履修の登録にあたっては教員によって講義番号が異なっているので、最終的に決定した担当教員の番号を確認すること。後期の一般実験演習IIで前期の一般実験演習Iと異なる教員に指導を受けることは不可能ではないが、履修上きわめて困難である。教員ごとに授業の進め方を第1回目の授業で詳しく説明するので、必ず出席すること。

d) 総合研究演習 I, II (4年次)

総合研究演習 I, II では、担当教員の指導のもとに卒業研究を作成する。4年次初頭に発表される各自の指導教員の総合研究演習に履修登録をすること。

卒業研究の内容は、データ(事例を含む)に基づくものであることが望ましいが、文献を読み、自分の考えをまとめたものも可とする。複数の者が、共同で集めた同じデータに基づいて卒業研究を作成するのはかまわないが、考察は人により当然異なるはずで、各自独立に1部を作成し提出すること。連名で1部のみ提出することはできない。枚数については、1枚800字として50から100枚を目安とする。提出期限は概ね年末となるが、決定次第掲示される。

卒業研究は、各自自主的に行うもので、受身の姿勢では作成できない。指導教員と相談しながら、できるだけ早くテーマを決め、着手すること。大学院進学を希望する学生は、卒業論文のコピー提出を求められることを想定して、論文レベルのものになるよう努力すること。

6. 英語履修上の注意

英語 I ~ V の学期毎の開講は次のとおりである。

【1年次後期】

英語 I
英語 II
英語 III

【2年次前期】

英語 II
英語 III
英語 IV

【2年次後期】

英語 III
英語 IV
英語 V

- i. 英語は選択必修であるが、1年次後期に関しては、学生の意思に関わらず、前期の基礎英語の履修状況に照らして学科が指定する I・II・III のいずれかを履修する。
- ii. 2年次前期以降は、学生の意思に関わらず、その学期に開講される英語のうちから、前学期の英語の履修状況に照らして学科が指定する科目を履修する。